
バカと新撰組と召喚獣

疾風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと新撰組と召喚獣

【Nコード】

N4281Z

【作者名】

疾風

【あらすじ】

真田涼佐。彼は幼い頃より、新撰組に入り任務をこなしてきた。小・中とちゃんと学校に行った。高1の時いろいろあって、高2の春、文月学園に転校することになった。今、明久たちとの学園生活が始まる。

はじめに（必ずお読みください）

はじめまして、疾風です。この小説が初投稿です。なので、文章がおかしかったり漢字が間違っていたりすると思います。そのへんは温かく、見守ってくれるとうれしいです。できるだけ間違えないよう気を付けます。また、初めに設定がわからないと話が全くのめこないのでちゃんと読んで下さい。では各設定の説明に入ります。

～ 主人公設定 ～

名前

さなだ りょうさ
真田涼佐

真田家十四代目当主であり、新撰組十一番隊長。

性格・見た目

基本優しく、武士道を手本としている。見た目はかなりカッコいい。

得意科目

数学（高橋女史以上）

苦手科目

英語（明久以下）

召喚獣装備

新撰組の服装、刀、

～ 新撰組について ～

警察と似たような役割。任務内容は、各担当地域の巡回、反政府軍の鎮圧など様々。十一個の隊から形成されており、隊長は近藤勇、副隊長は土方歳三、一番隊隊長は沖田総司。

～ 反政府軍について ～

高知に拠点をおき、今の政府に不安を覚え政府を倒そうとしている。代表は坂本竜馬。戦国時代で活躍した、大名たちの子孫が中心。九州にて同志を集めている。時々新撰組と戦闘を行う。

第一問　く始まりく

俺は真田涼佐。名前でも分かるように、真田家十四代目当主だ。父と母はいない。反政府軍に殺されたのだ。父は新撰組に所属していたため、俺もその跡を継いでいる。新撰組だといっても学校に行かない訳ではない。小・中とちゃんと学校に行った。高校一年もちゃんと学校に行った。・・・いろいろあったが。そして、今高2の春。俺はとある事情で、この文月学園に転校することになった。もともとこの辺は俺たち十一番隊の担当区域で、よく巡回に来ているのでそこまで新鮮味はなかった。というか、結構この辺では事件がよく起こるので基本ここで任務をする事が多いから、この辺はよく知っている。また、文月学園のこともよく知っている。なぜかという、ここの高橋女史（先生）から「数学の問題を作ってほしい」と頼まれてしまい、毎日問題を作って持って行っているからだ。どうやら俺が作った問題を生徒の宿題にしているようだ。・・・そんなこととしていいのか？と尋ねた所、どうやらテストの問題じゃなければ、だれが作ってもいいらしい。結構自由な学園なんだなーと思った。他にも試験召喚戦争など面白そうなシステムがあるらしい。明日がとても楽しみだ。おっと一次関数の問題も作らなきゃな。

第一問 く始まりく（後書き）

初めて本文を書きました。結構大変ですね。これから頑張っていきたいと思います！

第二問　く出会いく

転校初日だというのに遅刻してしまった。理由は簡単。新撰組の仕事があつたからだ。高橋先生には「遅れてもいいですよ」と言われているのだが遅れるのは悪いと思つたので、急いで学校に向かう。校門の前についたときは、当然のことだがもう生徒は誰もいなく先生が一人立っているだけだつた。あの先生は確か……

「おはようございます。西村先生。かつこ　鉄人　かつことじる。」

「……そこまで言うならいつそ鉄人と呼んでくれ。」

「いいんですか！ 軽い冗談のつもりだつたんですけど。」

本当に軽い冗談だつたのだが……。まあ西村先生と呼ぶことにしよう。

「ほら、この封筒を受け取れ。中に所属クラスが書いてある紙が入つてるぞ。」

「いや、いらないますよ。どうせクラスは分かつてるんですから。」

そう俺のクラスはもう決まつている。そうFクラスだ。この文月学園では振り分け試験の点数によってAクラスからFクラスに振り分けられる。頭のいい奴はAクラス、悪い奴はFクラス、といった具合だ。しかし俺は振り分け試験当日、重要な任務があつてテストを受けることができなかった。テストを受けなかった場合は、無得点扱いになる。だから俺のクラスはFクラス、そう決まつているのだ。

「まあ一応もらつておけ。そういう決まりだからな。」

西村先生がそう言うのでしかたなく封筒をもらい、自分のクラスへ急ぐ。

「・・・なんなんだ、このほかデカイ教室は」

と、驚きつつ教室の中を見てみるとそこでは高橋先生がいた。

「これが噂のAクラスか・・・」

高橋先生にこのクラスのことは聞いていたが、本物を見ると圧倒される。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年Aクラスの担任、高橋洋子です。よろしく願います。」

高橋先生が自己紹介している。

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

・・・すごい贅沢なクラスだな。冷蔵庫にはお菓子などの食料、エアコンは教室どころか各人に一台。壁には格調高い絵画や観用植物がさりげなく置かれていた。まるで高級ホテルのロビーみたいだ。
「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身もすべて学園から支給いたします。他にも何か必要なものがあれば遠慮なく何でも申し出・・・」

ついでに作った問題を渡そうと思ったが長くなりそうなので諦め、Fクラスへ急いで向かう。

Fクラスの前に到着した。これから俺の新たな学園生活が始まるんだなあ。と、思いながらドアに手をかけ、ドアを開けた。すると、見覚えのある顔が二つ目にとびこんできた。

「・・・なんでお前らがいるんだ。翔、瞬。」

「それはこつちのセリフだ！涼佐。なんでお前ほどのやつがFクラスにくるんだよ！絶対Aクラスに入れるだろ！」

「そうですね！隊長がこの学園に転校してくるのは分かってましたけど、なんでFクラスに配属されたんですか！」

この二人は、俺の隊十一番隊に所属している。先に話してきた方が伊達翔^{だて しょう}。伊達家十四代目当主で、新撰組十一番隊副隊長だ。基本銃で戦い、とても頼りになるやつだ。敬語を使っている方が山崎^{やまざき}瞬^{しゅん}。十一番隊の隊員で、情報専門だ。こいつの情報網はハンパじゃない。知りたい情報は何でも知っている。・・・全くだこから仕入れてくるのやら。まあとにかくこの二人とは親友だ。

「お前ら忘れてんのか！俺はその日任務があつただろうが！」

「ああそうだった、そうだった！そっぴや戦つてたわ。」

「やつと思ひ出したか。全くちゃんと覚えておけよ！それはそうとしておまえらはどうしてここに居るんだ？」

「あの日沖田さんにたくさん仕事を押し付けられちゃったんですよ。それでぼくも隊長と同じでテストを受けられなかったんですよ。」

「ここぞとばかりに押し付けられたんだ・・・」

「そうか、それは大変だったな。」

「まあ今回はかりは沖田さんに感謝だな。」

「そうですね。」

「どうして沖田さんに感謝するんだ？」

「だってこうして三人同じクラスになれたからさ。」

「そうだな。」

本当に感謝してもいいかもしれない。今度お礼を言っておかなきゃな。と、考えていると二人の男子が話しかけてきた。

「おう翔、瞬知り合いか？」

「ああ、うちの隊の隊長で親友だ」

「そうか、じゃあ自己紹介をさせてもらおう。俺は坂本雄二だ。翔や瞬とは仲良くさせてもらってる。あと、一応このクラスの代表だ。これからよろしくな」

「僕は吉井明久。ぼ「バカな観察処分者だ」ってなんてことを言うんだ雄二！」

「事実だろ。」

「事実でも言っていないことと悪いことがあるよ！」

「いつもこんなかんじなのか？瞬。」

「はい。いつもこんな感じです。面白いでしょう？」

「ああ、面白いなこれは。」

と言った後、まだいがみ合っている明久と雄二のもとへ向かう。

「明久、雄二お前らおもしれーな！俺と友達になってくれないか？すると二人ともいがみ合いをやめこう言った。

「「もちろん（だ）」」

「そうか。じゃあ、俺は真田涼佐。新撰組十一番隊隊長で、真田家十四代目当主だ。涼佐と呼んでくれ。」

「ああ分かった。お、先生が来たぞ。席に着こうぜ。」

雄二の言う通り先生が教室に入ってきたので、俺は翔と瞬の間の席に座った。

ここから俺の学園生活が始まった。

第二問 く出会いく（後書き）

結構短めな感じだったのに、とても時間がかかりました。投稿ペー
スやどのくらいの長さで区切った方がいいのかわかりません。できれ
ばアドバイスをお願いします。感想、意見などお待ちしております。

第三問　く戦闘準備く

「えー、おはようございます。二年Fクラス担任の福原慎です。よろしく願います。」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。まじかよ、チヨークすらろくに用意されてないのかよ……。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください。」

五十人程度の生徒が所狭しと座っている教室には机などない。あるのは畳と卓袱台と座布団。なんて斬新な設備なんだ。教室に入った時は、瞬や翔が先に目に入ったので設備のことはあまり気にしていなかったが、改めて見るとひどい設備だ。天井には蜘蛛の巣が張っている。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。」

誰かが先生に設備の不備を申し出る。

「あー、はい。我慢してください。」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れてます。」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

あたりを見渡すと壁にはひび割れや落書きでいっぱいだった。酷いな。ここは廃屋か……。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください。」
教室全体がかび臭い。きつと床の畳から匂っているのだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね……、廊下側の人から願います。」

福原先生の指名を受け廊下側の生徒のひとりが立ち上がり、名前

を告げる。どこかで見た顔だな・・・

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。」

どっかで見た顔だと思ったら、姉妹でチンピラに襲われてた所を助けたんだ。独特の言葉遣いだったのでよく覚えている。実は男だったと知った時はおどろいたもんなー。・・・あと、姉の方は結構かわいかったしな。

「-と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作り自己紹介を終える木下。

「秀吉さんは男の子ですよ。」

と、瞬が教えてくれる。

「わかつてるつつうの。一度会ったことがあるからな。」

すると、瞬は驚いた様子で、

「会った事あるんですか！いったいどこで？」

「任務中にチンピラに襲われていたところを助けたんだよ。」

「そうなんですか。じゃあ紹介しなくてもいいですね。ちなみに僕らとは友達ですよ。」

そんな話をしていると、いつの間にか次の生徒が立ち上がった。

「・・・土屋康太。」

なんて口数が少ない奴なんだ。これじゃ何も分からん。しかたないので瞬に聞いてみる。すると、瞬が説明してくれた。

「あの人は、土屋康太さん。情報網の大きさとても広く、情報通です。特に盗撮、盗聴などの技術は非常に高いです。また、いわゆるムツツリスケベというやつなので、明久さん達は「ムツツリー」と呼んでいます。」

「細かい説明をありがとう、瞬。明久達がそう呼んでいるなら俺もそう呼ぶことにしよう。」

それにしても見渡す限り男だらけだな。学年最低クラスともなると女子はほとんどいないのだろうか。

と考えていると次の人が自己紹介を始めた。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書き

が苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」

お。このクラスには珍しい女子だ。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

おい！ちよつとまでー！。さつきできたばかりの友達に危険がせまってるぞ！

「はろはろー」

笑顔で明久に手を振っている。手を振られた明久は青ざめている。

「あの人は島田美波さんです。島田さんは本当はBクラス並みの力を持っているのですが、日本語の読み書きがあんまりできないのであんまり成績は良くありません。でも数学は日本語が読めなくてもできる問題が多いのでなかなかの点数が取れています。また、明久さんによく関節技をかけています。」

どうしたら関節技をすることになるんだよ・・・

島田さんの自己紹介が終わり、その後は淡々と自分の名前を告げる作業が続く。次は明久の自己紹介だ。どんな自己紹介をするのやら。明久は一瞬立ち止まり、自己紹介を始めた。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に「ダーリン」って呼んで下さいね。」

「「ダーリンー！！」」

野太い声の大合唱。翔もノリノリで参加していた。

「失礼。忘れてください。とにかくよくお願いします。」

・・・明久完全にミスったな。次は翔か。どんなふうに話すんだ？

「俺は、伊達翔だ。新撰組十一番隊副隊長をやっている。」

翔がそう言ったとたん、みんながざわめきだした。

「十一番隊ってことは、あこがれの真田涼佐さんがいるんだよなあ！」

「そついうことだよな！」

「俺たちと同じ年齢なのに数々の任務をこなすし、しかも成功率は

99.9%。しかも自分のことより、人のことを優先するし、ほんとあがれちゃうよな！」

なんていうかめちゃくちゃ恥ずかしい。それも本気で言ってるみたいなので余計にだ。

「ちよつと待てみんな、いったんしずかにしてくれ。これから隊長のことを話すから。」

翔がそう言うともみんながしずまった。何か嫌な予感がした。

「……隊長はあそこにいるぞ！」

翔は俺を指さしそういった。

「えっ。」

みんながこちらを見る。

「……なんでそういうこと言うかなあ。翔。」

俺はため息をつきながら翔に向かってそう言う。

「いいだろ涼佐。自己紹介をする手間が省けたんだし。」

「まあいいや。俺の名前は真田涼佐。新撰組十一番隊隊長だ。これからよろしくな。」

「……はい!!!!!!」

驚くほど爽やかに返事をされたのでびつくりした。すると彼らの中から一人こちらに向かってきた。

「私は、須川亮と申します。このクラスの異端審問会の会長をしています。私たち異端審問会は、あなた様を尊敬しております。なにか御用がありましたら何でも申し付け下さい。」

「あ、ああ。」

なんだこいつらは……。いきなり言われて何が何だかつかめないぞ。俺を尊敬してる？なんじゃそりゃ？まあ、とりあえずそんな人じゃないことを言わなきゃな。

「あんな須川、俺はそんな……。」

「みんな！隊長がお話があるそうだ！」

「おう！」

「何か御用ですか？隊長。」

すぐに須川たちが俺の前でひざまずいた。なんか馬鹿らしくなってきた。

「須川、そういうのはやめてくれないか？頼みごとがあるときはまた呼ぶから。」

「はい！分かりました！いつでも用があるときはお呼びください。」
そう言うともんな席に戻っていった。ふう、なんて疲れるんだ。まあ慕ってくれるのは悪い気はしないが

「・・・です。よろしくお願いします。」

いつの間にか瞬の自己紹介は終わっていた。あいつは目立つことが嫌いだからな。

その後も、名前だけを言うていくだけの単調な作業が進む。そろそろ終わらないかなあ。と思ってきた時に不意にがらりと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

「・・・えっ・・・」

誰かというわけでもなく、教室全体から驚いた声上がる。なんでみんな驚いているんだ？明久は驚いてないようだが・・・。翔に聞いてみるか。

「翔、どうしてみんな驚いているんだ？遅刻なんて見慣れた光景だろ？」

「見慣れてるのはお前だけだっつの・・・。まあいいや、これから自己紹介するみてえだからそっちを先に聞いてからにしようぜ。」

瞬の言うとおり、女子生徒が自己紹介しようとしていたのでそちらに耳を傾ける。

「あの、姫路瑞希といいます。これからよろしくお願いします・・・。」

小柄な身体をさらに縮こめるようにして声を上げる姫路。可憐な容姿は、男だらけのFクラスで異彩を放っている。皆はその容姿を見て驚きの声を上げたのだらう。と俺は思った。ところがそうではな

かった。

「はい！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と右手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

登校するなり、いきなり質問が自分に向けられ驚く姫路。後ろでは、明久が姫路をうつとりと眺めていた。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

どういうことだ？姫路はここに居てはいけないのか？すると翔が教えてくれた。

「何が何だかわからない、って顔をしてるな。仕方ねえな、教えてやるよ。姫路はあの外見だから人目を引くだろう？」

「そうだろうな。」

「だが、それよりもすごいのがその成績だ。入学して最初のテストで学年二位を記録し、その後も上位一桁以内に常に名前を残しているほどだ。」

「そんなに頭のいい奴がどうしてこのクラスに居るんだよ？」

「さあな。それが俺も知りたいってわけだ。」

翔も知らないようなので、姫路のほうに耳を傾ける。

「そ、その・・・」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路が口を開く。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・」

なんだ、俺たちと同じかよ。試験途中での退席も無得点扱いとなるらしい。そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳の声が上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな。」

「俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「今年一番の大嘘をありがとう」

どうやら俺の想像を超えるバカばかりらしい。

「で、では今年一年よろしく願いますっ！」

そんな中逃げるようにして、明久と雄二の隣の空いている卓袱台に着こうとする彼女。明久がまた鵜鳥と姫路を見つめている。

「き、緊張しましたあゝ・・・。」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路。さてとちよっと話に行くか。

「あのさ、姫・・・。」

「姫路。」

明久の声にかぶせるように雄二が声をかける。・・・なんか明久がめっちゃ悲しそうな顔をしているんだが。

「は、はいっ何ですか。えーっと・・・。」

あわてて雄二の方を向きスカートの裾を正す姫路。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む。でこっちにいるのが新撰組トリオだ。」

「・・・おい、いつから俺らはお笑いコンビを組んだんだ。まあいいや、俺は真田涼佐だ。よろしく頼む。」

「俺は伊達翔だぜ。これからよろしくな。」

「僕は山崎翔です。これからよろしく願いますね。」

「あ、姫路です。よろしく願います。」

深々と頭を下げる姫路。挨拶も丁寧だし、育ちが良さそうだな。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる。」

雄二が質問すると明久が口を挟んできた。明久って優しいんだな。「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。明久がとても悲しそうな顔をしていた。それを見た雄二がフォローしようとして・・・

「姫路。明久がブサイクですまん。」

するはずがなかった。なんで俺は雄二が明久のフォローすると思っただ。雄二がそんなするはずがないだろ。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・。」
「確かにそうだな。俺が見る限りでは、明久はかっこいい方だと思うぞ雄二。」

「そう言われるとそうかもしれないな。俺の知っているやつにも、明久に興味を持っていてる奴がいたような気もするし。」

「え？それは誰・・・」

「そ、それってだれですか!？」

明久のセリフが姫路に遮られる。まあ聞きたいことは同じだったようだが。それにしても本当に女子はこういう話好きだよなあ。俺にはようわからん。

「確か、久保・・・」

久保、何って言うんだろうな。知りたいってほどじゃないが少し気になるな。

「・・・利光だったかな」

俺には男の名前にしか聞こえないんだが・・・。

「隊長、久保利光さんは男ですからね。」

「そうだよな・・・」

うん、やっぱり男だよな。

「・・・」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな。」

俺でも男に好かれていていると思ったらおんなじようになると思う。

「安心しろ明久。半分冗談だ。」

「え？残り半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です。」

「ねえ雄二！残りの半分は？」

取り合おうとしない雄二に対し、しつこく聞こうとする明久。

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね。」

教卓をたたいて先生が警告を発してきた。

「ああ、すみま・・・」

バキィッ バラバラバラ・・・

突然教卓がごみ屑と化した。ひどいな・・・。

「え・・・替えを用意してきます。少し待っていてください。」

気まずそうにそう告げると、足早に教室を出て行った。

「あははは・・・」

姫路が明久の隣で苦笑いしている。すると明久が、

「・・・雄二、涼佐達、ちょっといい？」

と言ってきた。

「ん？なんだ？」

「どうした明久？」

「ここじゃ話しくいから、廊下で。」

「別に構わんが。」

「別にいいが。」

俺と雄二と翔と瞬は立ち上がって廊下に出る。そして雄二が口火を切った。

「んで、話って？」HR中だけあって廊下に人影はない。

「この教室についてなんだけど・・・」

「Fクラスか。想像以上にひどいもんだな。」

「蜘蛛の巣がそこらじゅうに張っているしな。」

「そうだな、あれ見たときはここが勉強するところか？と思ったぜ。」

「

「お世辞にもきれいとは言い難いですね。」

「みんなもそう思うよね。」

「「もちろんだ」「」

「そこで僕からの提案なんだけど、折角二年生になったんだから「試召戦争」をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に。」

「・・・何が目的だ。」

「いや、あまりにひどい設備だから。」

「『『『嘘つけ』』』」

「・・・明久、嘘をつくならもつとまともな嘘がつけねえのか。」

「ぐつ。あー、えーつと、それは、その・・・。」

明久がためらっているならこつちから言わせてもらいますか。

「・・・姫路のため、だろ？」

俺がそう言ったとたん明久の背筋が伸びた。単純なやつだ。

「ど、どうしてそれを。」

「俺は相手の思っていることを読み取ることができるんだ。」

「隊長の人間観察力はすごいですよ。どの人が犯罪を犯したかすぐに分ちやうんですから。」

「まあ自分の恋愛のことに対してはものすごい鈍いけどな。」

そんなに俺鈍いかなあ？結構敏感だと思うが。

「べ、別にそんな理由じゃ・・・。」

「言い訳は必要ないからな。」

明久がまだあがくので、雄二がバツサリと言い切った。

「気にするな。お前に言われるまでもなく、俺自身Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ。」

「そうだな、俺らも一回やってみたいとおもっていた所だ。」

「そつなの？でもどうして？みんなそこまで勉強してない気がするけど。」

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな証明を試してみたくてな。」

「俺はいままでやってきたことがどれほど通用するのか知りたいからだ。」

「へー。」

「Aクラスに勝つ作戦は俺と涼佐で考えると・・・おつと先生が戻ってきたぞ。」

雄二の声に促されるまま、俺たち五人は教室に戻った。

「さて自己紹介の続きをお願いします。」

「えー、須川亮です。趣味は・・・」

特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ。」

先生に呼ばれて雄二がゆつくりと教壇に向かう。坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ鷹揚にうなずく雄二。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きに呼んでくれ。」

Fクラスというバカの集まりで比較的頭がよかったというだけの生徒。

「さて、皆に一つ聞きたい。」

そんな生徒がゆつくりと全員の目を見るように告げる。皆の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて俺らも雄二の視線を追い、それらの備品を順番に眺めて行った。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「・・・不満はないか？」

「大ありじゃあつ！！」

二年Fクラス生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる

！
」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

級友たちの反応に満足したのか、地震に満ち溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「FクラスはAクラスに「試験召喚戦争」を仕掛けようと思う。」

Fクラス代表坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第三問　く戦闘準備！く（後書き）

どうも疾風です。今回は長めの文を書いてみました。僕はまだ中学生なので誤字脱字や文章が間違っている所があるかもしれないので、間違いがあつたら教えてくれるとうれしいです。感想、ご意見などお待ちしております。

第四問　　＼Fクラス一致団結！＼

Aクラスへの宣戦布告。それはFクラスにとって非現実的な話であった。

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいたら何もいらない。」

そんな弱気な発言があちこちで上がる。確かに俺たちがAクラスに勝てるなんて誰も思わないだろうな。

この文月学園は変わったテストの仕方だ。このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数には上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

また、科学とオカルトと偶然により完成させた「試験召喚システム」というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された試み。その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争・・・試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。

ちなみに、あまり世間には知られていないが、このシステムを本当の戦争に利用しようと反政府軍が日夜狙っている。だから、俺がこの学園に転校してきた。

話をもどそう。その試験召喚戦争で重要になるのがテストの点数なんだが、AクラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。正面からまともに合ったら必ず負けるだろう。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる。」

そんな圧倒的な戦力差を知りながらも雄二はそう断言した。

「何を馬鹿なことを。」

「できるわけないだろう。」

「何の根拠があつてそんなことを。」

否定的な意見が教室中に響き渡る。

確かに普通に考えたら、そんな事は無理だと思うだろう。・・・
そう、普通の奴なら。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素がそろっている。」

こんな雄二の言葉を受けクラスの皆が更にざわめきだす

「どこにそんな要素があるんだよ。」

「このクラスにそんな要素なんてないだろ。」

「今からそれを証明してやる。」

不敵な笑みを浮かべ壇上から皆を見下ろす雄二。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いていないで前に来い。」

「・・・！！（ブンブン）」

「は、はわっ。」

必死になつて否定のポーズをとるムツツリー二。姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、土屋はついた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

・・・どうやら瞬の言っていたことは正しかったらしい。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者（ムツツリー二）だ。」

「・・・！！（ブンブン）」

雄二がそう言つたとたん、またクラスがざわめき始めた。

「ムツツリー二だと・・・？」

「馬鹿なヤツがそうだというのか・・・？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を隠そうとしているぞ・・・。」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ・・・。」

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れだ。こんなバレバレの状態でも隠そうとするその姿は、まさに「ムツツリーニ」という名前にふさわしかった。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆だってその力は良く知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですか？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している。」

確かに試召戦争になったら頼りになる戦力だろう。

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。」

「彼女ならAクラスにも引けを取らない。」

「ああ。彼女さえいれば何もいらなないな。」

なんか今、関係ないことを言ったやつがいる気がしたんだが……。

「木下秀吉だっている。」

……確か演劇が得意だと言っていたな。なんかの作戦で使えるかもな。

「おお……！」

「ああ。アイツは確か、木下優子の……。」

「それに、新撰組の奴らだっている。」

「おお！俺たちには隊長がいたじゃないか！」

「そうだった！隊長がいれば負けるはずがないじゃないか！」

「当然俺も全力を尽くす。」

「確かに何かやってくれそうだ。」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じで体調不良だったのか。」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている。」

……シン

上がっていた士気は、一気に下がった。・・・こんな時に笑いを求めるなよ、雄二。まあやるんだろうなあ。という予想はしてたけどな。

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！折角みんなの士気が上がったのに台無しじゃないか！」

「誰だよ、吉井明久つて。」

「聞いたことないぞ。」

「ほら！みんな僕のことなんて知らないじゃないか！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを・・・つて、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないよね？」

・・・少しは明久にも原因があると思うんだが。

「そうか。知らないのなら教えてやる。こいつの肩書きはくく観察処分者>>だ。」

初めに明久と会ったときにも聞いたが、観察処分者つてなんだ？するとある生徒が、

「・・・・・・・・それつて、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

そうなのか！すると明久はとってもバカつてことか。

「ち、違つよつ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で。」

「そうだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するな、バカ雄二！」

「なるほど！そういうことだったのか！」

「涼佐も納得しないで〜」

やばい。明久をいじるのめちやくちゃ楽しい。癖になりそうだ。

「あの、それつてどういうものなんですか？」

そうそう、俺もそれが知りたかつたんだよ。明久がバカつてことは分かったが、具体的にどんなことになるんだ？

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういうった雑用を、特例としてのものに触れるようになった召喚獣でこなすといった具合だ。」

「そうなんですか？それって凄いですね。召喚獣って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですね。」

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ。」

明久が手を振って否定する。するとある生徒が、

「おいおい。＜＜観察処分者＞＞ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだよな。」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことだよな。」

へーそんな感じなのか。・・・待てよということは、

「俺と同じってことか。」

「……えっ……」

「どういう事ですか？隊長。」

「いやだから、明久と同じってことだよ。」

「涼佐も僕と同じ観察処分者なの？やったあ！僕だけじゃなかったんだ！」

「涼佐が観察処分者なわけないだろ。何か他の理由があるに決まってるだろ。明久、だからお前は観察処分者なんだよ。」

「それは関係ないでしょ雄二！それより、観察処分者じゃないなら何なの涼佐。」

なんだっけなあ？なんかめんどくさい名前だった気がする。思い出した！

「えーとだな、確か特別処遇者と言ったけなあ。」

「そんなのがあるんですか隊長！で、どんな役割なんですか？その特別処遇者っていうのは？」

瞬が知らないとは珍しいな。なんかちょっとうれしいな。

「特別処遇者と言うのはなあ確か、基本は明久と同じで教師の雑用をするんだ。違うところは、フィールドバックというのが、99%自分に返ってくる事とか、＜＜二体同一＞＞っていうのができるとか、そんな所だな。」

「フィールドバックが99%も返ってくるの！」

明久がものすごく驚いていた。

「ああ。そうらしい。」

「そんなに返ってきたら死んじゃうよ。」

「そうだ。明久は40%であんなに苦しんでいたぞ、大丈夫なのか涼佐。」

明久と雄二が心配してくれた。

「ありがとう、雄二と明久。近藤さん曰く、死なない程度らしいからだいじょうぶだ。」

「そうなの？それならいいけど。」

まあ、相当重症を負う羽目になるんだろうけど……。近藤さんが「お前の無茶するところを直すため。」と言っていたからな。

「涼佐、ところで<<二体同>>っていつのはどんなやつなんだ？」

と、翔が聞いてきた。

「その話はまた今度、ということでもいいか。そろそろ話をもどした方がいいと思うんだが。」

「そうだな。じゃあまた聞かせてくれ。」

そう翔が言つと雄二が大きく咳払いして、こう言った。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。」

「そうだな、そのへんが妥当だろう。」

俺がそういうと続けて雄二が、

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

「「「当然だ！」「」「」

というのでつい俺も、

「全軍ペンを執れ！出陣の準備だ！」

「「「はい！！」「」「」

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

「「「うおおーっ」「」「」

俺たちFクラスの戦いが幕を開けた。

第四問　　ゝFクラス一致団結！ゝ（後書き）

次からいよいよDクラス戦です。僕は試召戦争のところが好きなので、気合を入れて書いていきます。とはいっても駄文になってしまふと思いますが…。「ちょっと見てやるか。」ぐらいの気持ちで見てくださいとうれしいです。ご意見、感想などお待ちしております。

第五問　　～開戦直前～

「というわけで、明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

と雄二のありがたい言葉が明久に投げかけられる。さあ明久はこの雄二の言葉の意味を理解できるのか？

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

おお！明久が気づいたぞ！ちよつと明久のことバカにしすぎてたな。ちよつと明久への見方を変えてやらなくちゃな。

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる。」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている。」

と、力強く断言する雄二。明久はどうする？

「大丈夫、俺を信じる。俺は友人を騙すようなことはしない。」

さらに追い打ちの一言。嘘だ、たった今騙しているじゃないか。

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。」

・・・明久はやっぱバカだったか。まったく、世話の焼けるやつだ。

「仕方ない。俺も一緒について行つてやるよ、明久。・・・友人がボロボロになつて帰つてくるのなんて見たくないからな。」

雄二は少し悔しそうな顔をしてから、

「じゃあ、二人とも頼んだぞ。」

と言つて俺たちを送り出した。

「じゃあ行くぞ明久。」

「うん。」

俺たちはDクラスに向かって歩き出した。

「騙されたあつ！」

明久が大声で叫ぶ。すると雄二が、

「まあ、よかったじゃないか。けがはなかったんだろ。」

「それは確かになかったけれど！涼佐がいなかったらボコボコにされてたよ！」

あいつら宣戦布告した途端、襲ってきやがった。まあ俺が最初に来たやつを背負い投げしたら、だいぶおとなしくなったがな。相手もけがはなかったようだし、万事解決と言ったところだ。

「よかったじゃないですか、吉井君！無事に帰ってこれたんですし。」

「そうよ吉井、けがは無かったんでしょ。」

姫路と島田が明久に駆け寄って来た。

「うん、そうだけど・・・。」

「ならいいじゃない。おとなしくウチに殴らせなさい。」

「・・・なんでそんな展開になるんだ。」

「なんとなくよ。」

きっぱり答えられた。

「あんた確か真田っていったよね。私は島田美波、これからよろしく。」

「ああよろしくな。」

なんか明久にとって危険な人のような気がする。

「大変じゃったの。」

すると小柄なで一見少女に見える男子が近づいてきた。すると今度は俺の方を向いて、

「おぬし、わしの事覚えておるか？知らないのじゃったらいいのじやが。」

と言ってきた。

「ああ、覚えているぞ。チンピラに絡まれてたよなあ。」

「おお、やっぱりおぬしじゃったか！あの時は本当に助かったのじや。」

「どういたしまして。姉さんの方も元気にしてるのか？」

「・・・そうじゃのう。元気すぎるってところかのう？」

「そうかそれならいい。」

なんか明久が俺と秀吉が知り合いだったことに驚いていたがほっとしておこう。

教室の中を見るとなんかムツツリー二が頬をさすっていた。

「ムツツリー二、覗いてた時の畳の跡ならもう消えてるぞ。」

「・・・なぜその名前を知っている！？」

「瞬に教えてもらったんだ。俺は真田涼佐。これからよろしく。あと、盗撮や盗聴は控えるようにな。」

「・・・よろしく、涼佐。」

ムツツリー二はうなずきながらそう言った。・・・本当に分かっているんだろうか？すると雄二が、

「おい涼佐。作戦を考えるから屋上に行くぞ。」

と、言ってきたので俺は屋上へ向かった。

「・・・こんなもんか。涼佐。」

「そうだな、これなら勝てるだろう。」

「唯一心配なのが、お前の実力が重要になるところだな。」

「大丈夫だ。心配するな。」

「・・・ああ分かった。そろそろ明久たちを呼びに行ってくる。」

雄二はそういうと、屋上から出て行った。さすがは元神童、なかなか面白い作戦をもっていたな。Fクラスは個性あふれるやつばかりだ。それぞれの個性を生かしていけば、Aクラスに必ず勝てる。そ

うおもった。・・・刀の手入れでもしておくか。

しばらくして雄二たちが屋上にやってきた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

雄二がフェンスの前にある壇さに腰を下ろす。

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど。」

僕らもそれにならって各々腰を下ろした。

「それじゃ先にお昼ごはんってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなもの食べるよ。」

「そうだな。途中でおなかがついて動けないってことになったら助けてやらねえからな。」

「そう思うなら、翔でも雄二でもいいから何かおごってくれとうれしいんだけど。」

なんだ明久はお昼ご飯がないのか。・・・どうせ明久の事だから、ゲームにでも使ったんだろう。

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路がそういうと明久がその疑問に答えた。

「いや。ちゃんと食べてるよ。」

「・・・あれは食べていると言えるのか？」

雄二の横槍が入る。

「何が言いたいのだ。」

「いや、お前の主食って・・・水と砂糖だろう？」

雄二の哀れむような声。・・・いや、さすがにそれはないだろう。というかそうであってほしい。

「きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「・・・なあ翔。俺の記憶だと、砂糖は食べるとは言わなかった気がするんだが。」

「ああ。舐める、が適切な表現だ。」

そんな明久の食生活を知り、なんだか優しい目でしか明久を見ることができなかった。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

仕送り? 明久も一人暮らしなのか。

「明久さんは、両親が仕事の都合で海外にいますよ。それで明久さんは一人暮らしをしてるんです。」

いつものように瞬が教えてくれる。・・・なんで俺の知りたいことが分かるんだ? 何も言っていないのに。まあそこは気にしない方向でいこう。

「・・・あの、よかつたら私がお弁当作ってきましようか?」

「え?」

突然優しい声が明久にかけられる。

「ほんとにいいの? 僕、砂糖と塩以外のものを食べるのなんて久しぶりだよ!」

「はい。明日のお昼でよければ。」

「よかつたな明久。手作り弁当だぞ。」

「うん!」

明久が本当にうれしそうな顔をしている。すると島田が、

「・・・ふん。瑞希つてずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて。」

と、棘のある一言。

「あ、いえ! その皆さんにも・・・」

「俺たちにも? いいのか?」

「はい。いやじゃないのなら。」

「それは楽しみじゃのう。」

「・・・(コクコク)」

「・・・お手並み拝見ね。」

皆が口ぐちにそう言う。でも俺らの分も入れると多すぎやしないか? そう思った所、翔や瞬もそう思っていたようだったので、

「姫路。さすがに量が多すぎるだろう？だから俺たちの分は作ってこなくていいぞ。」

「言っておいた。」

「で、でも」

「いいんだ俺たちは涼佐に作ってもらうからよ。」

「そうですよ姫路さん。僕たちは隊長に作ってもらいますから。」

「・・・おいお前ら、いつそんなこと決まったんだ？そんなこと聞いてねえぞ？」

「じゃあお願いしてもいいですか？真田君？」

「・・・ああ。」

仕方なく了承する。

「楽しみにしてるぜ、涼佐！」

「隊長の料理なんて久しぶりだなあ！わくわくしてきました！」

「・・・まったく。」

「・・・なんでこんなことになったんだ。」

「じゃあ六人分ちゃんと作ってきますね。」

俺らの分を抜いたとしてもそんなにあるのか。

「姫路さんて優しいね。」

明久が言う。

「そ、そんな・・・。」

「今だから言うけど、僕初めて会う前から君の事好き・・・」

「おい明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ。」

「・・・にしたいと思っていました。」

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ。」

明久が欲望をカミングアウトしたところで、話をもどしますか。

「おい雄二。そろそろ試召戦争のことに戻すぞ。」

「ああ。そうだな。」

「・・・まったく。話が脱線しすぎだぞ。」

「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAク

ラスじゃろう?」

「そういえばそうですね。」

「まあな。当然考えがあつてのことだ。」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えですか?」

「Eクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな。」

「どうして?」

明久が雄二に尋ねる。

「振り分け試験の時点では向こうの方が強かったかもしれないな。だが、今はどうだ? 姫路にも問題はないし、実践経験豊富な新撰組の奴らもいる。この状態なら、正面からやりあつてもEクラスに負けることはない。つまりAクラスが目標である以上、Eクラスなんかとやっても意味がないってことだ。」

「? じゃあDクラスとは正面からぶつかるて厳しいの?」

「ああ。」

「だったらAクラスに最初から挑もうよ!」

「初陣だしな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろう?」

「でも、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ。」

明久がそんな弱気な発言をするので、

「明久、俺たちが負けると思つか?」

と言つてやつた。

「涼佐の言つとおりだ。俺たちは負けない。ウチのクラスは・・・最強だ。」

「いいわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「やってやるぜ!」

「情報戦ならまけませんよ!」

「・・・・・・(グッ)」

「が、頑張りますっ。」

「よし、僕も頑張るぞ！」

打倒Aクラス。

荒唐無稽な夢だといわれるかもしれない。

でもやってみないと何も始まらない。

何かを成し遂げてみるのも悪くない。

「さてと、雄二。作戦を説明しますか。」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺は勝利のための作戦を話した。

第五問　　ゝ開戦直前ゝ（後書き）

どうも疾風です。今回はDクラス戦直前を書いてみました。だいぶパソコンの扱いに慣れてきて短い時間で文字が打てるようになって来ました。相変わらず駄文となっていますが温かく見守って頂けるとうれしいです。感想、ご意見などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4281z/>

バカと新撰組と召喚獣

2011年12月20日19時46分発行